

## はじめに

鹿児島大学多島圏研究センターでは、「多島域における小島嶼の自律性」をテーマとしたプロジェクト型の共同研究を実施している。その一環として、薩南諸島に住む人々の暮らしを国内や海外に紹介する本の出版を企画した。鹿児島の離島に住む人々が抱える諸問題、そして、それらの問題を乗り越えるための島おこしの事例を記録し、離島の将来を考えてがかりにしようとするものである。

我国では高度経済成長期に地方から大工業地帯への若年労働力の移動があり、その結果、地方は過疎と後進性からの脱却という命題を抱えることになった。一方、高度経済成長の恩恵を最も受けるはずであった都市部においても、都市の脆弱性は克服できなかった。住宅事情や通勤事情の悪さは都市生活をゆとりのないものにし、無秩序な開発、公害の発生、ごみの増加、産業廃棄物による汚染などは深刻な環境問題をもたらした。

高度経済成長期を契機として都市化は全国に及び、伝統的な共同体は急速に崩壊し、全国に画一的な地域社会を生み出すことになった。しかし、変容した地域社

会で次々に生ずる問題は、切り離されていた自然の価値や伝統的な地域社会の重要性を意識させることになった。このような住民の地域に対する意識の高まりが、住民自身による地域社会形成の動きを生み出している。

鹿児島県の特徴として鹿児島市とそれ以外の自治体の規模の違い、それと離島の存在があげられる。鹿児島県では鹿児島市への人口集中に伴い、郡部の過疎化と高齢化が進み、大きな不均衡が生じてしまった。この状況は離島ではさらに著しいものとなっている。鹿児島県の多くの離島は自治体の合併によっても効率化は期待できないであろう。しかし、環海性、隔絶性、狭小性などの制約の中で、離島では優れた自然環境の中で貴重な歴史文化を育てており、地域の多様性が保全されている。また、離島の地域社会では伝統的な共同体が地域活性化の原動力となり、自らの英知と自助努力により多種多様な地域おこしの取り組みが行われている。

この本で紹介する地域おこしに取り組む人々の活気あふれる様子が、固有の歴史文化や自然の価値を見直し、21世紀の地域の

あり方を考える機会になることを期待したい。

終りに、本書の刊行にあたり、様々なご協力をいただいた鹿児島県市町村の関係者の皆様、地元住民の方々に厚くお礼申し上げます。また、本プロジェクト実施に対して教育改善推進費による援助をしていただいた鹿児島大学の田中弘允学長に感謝申しあげます。

野田伸一

(鹿児島大学多島圏研究センター長)